次期北極域研究プロジェクトの検討の進め方

➢ 現在、実施中の北極域研究加速プロジェクト（令和2年度開始）は、令和6年度が事業最終年度のため、北極域研究推進プロジェクト推進委員会において、次期北極域研究プロジェクトの今後の方向性を検討しているところ。

北極域研究推進プロジェクト推進委員会
（事業の公募、選定、評価等を実施）

R6.3.8

第15回委員会

- ArCSⅡの成果及び中間評価における留意事項への対応状況の報告
- 次期北極域研究プロジェクトの方向性について意見交換

R6.6月

第16回委員会

- 委員会としての意見取りまとめ

予定

R7年度事業として実施予定

※事業実施には、令和７年度当初予算の政府案に本事業に関する予算が盛り込まれ、当該予算の国会成立が必要となります

R6.3.25

第71回 科学技術・学術審議会 海洋開発分科会

・ArCSⅡのこれまでの成果と今後の方向性について説明、意見交換

R6.7月～8月

第72回 科学技術・学術審議会 海洋開発分科会

・次期北極域研究プロジェクトの事前評価

次期北極域研究プロジェクトの方向性（案）

４．次期北極域プロジェクトの方向性（案）

● 前ページ「３．今後の課題」を踏まえ、

・北極域研究船「みらいⅡ」を活用した観測データ空白域の観測

・「みらいⅡ」を国際研究プラットフォームとして活用した国際連携の推進

・分野を横断した観測と研究の一体的な取組

などの取組を実施するため、以下の方向性で次期北極域研究プロジェクトの実施を検討

１．北極域研究船「みらいⅡ」等を活用した北極海海氷域を中心とした観測データ空白域の観測研究

（今後の課題①②③⑦）

（例）・「みらいⅡ」等を活用し、通年での北極海の環境変化を観測する総合的な研究開発

・十分に解明されていない環境変化やその影響（森林火災、温室効果ガスの収支など）についての観測研究

・国際情勢の変化や経済のグローバル化などの影響による北極域の地域社会の急激な変化等の把握

・「ニーオルスン基地」等を活用した国際連携による共同研究の実施や、研究者派遣の拡大等による国際共同研究の強化　等

２．「みらいⅡ」の国際研究プラットフォームとしての活用や国際共同研究等による国際連携の推進

（今後の課題⑥⑦）

（例）・国内外の若手研究者、学部学生、技術者、若手船員等の乗船機会の確保など、北極域研究に係る人材の裾野の拡大

・「ニーオルスン基地」等を活用した国際連携による共同研究の実施や、研究者派遣の拡大等による国際共同研究の強化（再掲）　等

３．分野横断的な観測と研究による社会課題の解決に貢献する研究開発の推進

（今後の課題④⑤）

（例）・日本を含む全球への影響把握や将来予測の精度の向上など高度な情報を創出、北極圏国だけでなく非北極圏国でも利活用される社会課題（森林災害、水産業への影響、健康・住環境等）の解決にむけた研究

・「分野を横断した観測研究」、「シミュレーション研究」、「社会課題の解決に貢献する情報創出」を一体的に推進する研究開発　等

第15回北極域研究推進プロジェクト推進委員会（R6.3.8）での主な意見

観測・研究について

- 北極域は最も環境変化が大きい場所であることから、空白域に限らず、**継続的に観測する重要性の明示**が必要。
- ロシア情勢により観測等が十分にできないこともある中で、次期プロジェクトの実施により**科学的に進捗が期待できる部分の明示**が必要。
- 我が国が観測データを取得し、それに基づく科学的知見を国際機関等に提供することで、これまで以上に**国際貢献**していくことが必要。
- 北極域研究を推進する上で、継続性に加えて、新規性の観点も必要。

研究基盤について

【人材育成】

- 育成した人材について、研究分野のみならず、多様な関連分野への参画実態などをフォローアップすることで、**若手のキャリアパスがイメージできるような人材育成**を期待。

【北極域研究船「みらいⅡ」】

- 「みらいⅡ」の着実な運航とともに、**国際研究プラットフォームとして国際連携**をこれまで以上に密にし、我が国が砕氷船を持つことにより、北極域研究において主導的な立場で活動することを期待。

【情報発信】

- 北極の環境変化及びArCSの研究活動について、**社会に向けて更なる情報発信**を行うことが必要。